

テニス用語の邦語化に関する研究

後 藤 光 将

1. はじめに

英語禁止論の始まりは、大正期に始まる英語教育不要論であった。当初は、英語教育界のみの比較的狭い議論であったため、社会全体を巻き込み、政府の政策に直接影響を及ぼすには至らなかった。ところが、昭和 15 (1940) 年頃になると、社会全体を巻き込んだ英語禁止へと急展開を見せ始めた。この動きは日本国内における反英米機運の急激な高まりを受けたものであり、翌年の太平洋戦争開始とともに英語は「敵性言語」として、その禁止措置は様々な分野に及んだ¹⁾。

昭和 15 (1940) 年 9 月 13 日、日本野球連盟より各プロ野球球団にチーム名の英語禁止が通達された。この改名は、内務省など公的機関からの直接的指示を受けたものではないが、「新体制運動が風靡」²⁾していたためやむなく実施されたのであった。また、この時期、大日本東京野球倶楽部（現東京読売巨人軍）のエースであった、ロシア人のビクトル・スタルヒン投手は球団の指示により須田^{すたひろし}博に改名した。

日本野球連盟の通達と同時期〔昭和 15 (1940) 年 9 月〕に、東京学生米式蹴球連盟が「米式蹴球」を「^{がいきゅう}鎧球」と改称した。これに伴い同連盟も東京学生鎧球連盟となった。

昭和 17 (1942) 年 4 月に大日本体育協会が解散され、同協会を発展継承

するかたちで大日本体育会が発足した。各国内競技連盟も相次いで解散して、大日本体育会の一部会として継承されることになった³⁾。昭和 18 (1943) 年 3 月、同会は英語を用いたスポーツ名を禁止した。同時に、各種目の用語が邦語化された⁴⁾。この流れの中、テニス用語も邦語化されることとなった。昭和 19 (1944) 年、大日本体育会により『昭和十九年度 庭球規則 附邦語化の庭球用語、審判の心得』が発表されたことに一連のテニス用語の邦語化の作業は一応の達成を見たといわれる。

以下、テニス用語の邦語化の流れを辿ってみる。

2. テニス用語の邦語化がおこなわれた理由

2-1 ルールの平易化による普及のための措置 [昭和 10 (1935) 年～]

『ローンテニス』第 11 巻 5 月号 [昭和 10 (1935) 年 5 月] に「庭球用語の邦語化」⁵⁾ という短い記事が見られ、幾つかの邦語化された用語が紹介された。

セット＝節

セットポイント＝節點

ベースライン＝底線

サイドライン＝側線

ミッドコート＝中陣

フォアコート＝前陣

バックコート＝後陣

チャンピオンシップス＝優勝権 (従来選手権と譯さる)

ゲーム＝元 (試合の意味を含めず、スコアー上の意味のみ)

ゲームポイント＝元點

ドロップショット＝落打（従来落球と譯さる）

これは、ライン名やポイント名など、僅か 11 個の用語のみであるものの、テニス用語の邦語化が定期刊行物の類で紹介された嚆矢といえる。しかし、ドロップショット（落打）に関して、「従来落球と譯さる」と付記されていることから、テニス用語の邦語化は、この当時既に一部の用語において部分的には一般化されていたと考えられる。

また、同誌の第 9 卷 6 月号から第 12 卷 11 月号〔昭和 10（1935）年 6 月～昭和 11（1936）年 11 月〕の約 1 年半に亘り「庭球用語解」という記事が連載された。この中では、数多くのテニス用語を注解することを通して、その一部で邦語化が試みられている。

しかしながら、この段階では反英米あるいは国粹的な論調は見られず、それまでの英語表記のテニス用語を日本人に理解しやすいように、より平易に表記したものと思われる。

2-2 時局に応じた国粹的措置〔昭和 15（1940）年～〕

戦前のテニス専門誌は『ローンテニス』の他に、『テニスファン』が刊行されていた。『テニスファン』第 9 卷第 1 号〔昭和 15（1940）年 1 月〕に「懸賞募集 庭球用語の改正」というタイトルの懸賞記事が掲載された。前述の『ローンテニス』第 11 卷 5 月号の記事内容を紹介した上で、以下のような主旨を謳っている。

本社は二千六百一年の新春に以上の庭球用語及び其他讀者諸兄姉で御氣付の用語の日本語化を懸賞募集したいと思います。スポーツの新體制に用語の日本語化もありますが、吾々の主旨は決して末梢的なものではなく、庭球の普及に若し庭球用語の日本語化が適當にされるならば貢献す

る事も少なくないと思ひますし、又新聞や雑誌の如き一定の紙面に活字で組込まれる場合、少しでも字数の節約が出来れば、より多くの記事も載せられる事にもなりますし、かうした主旨から諸兄姉に御勘考する次第です⁶⁾。

「新體制」という用語からも、全体主義に突き進んでいく当時の世相をあらわしているといえるが、総じて反英米的な意味合いは感じられない。ところが、この懸賞募集に呼応するかたちで、翌月の『テニスファン』第9巻第2号〔昭和15(1940)年2月号〕には田中薫氏の「近頃疑念一束」という記事が掲載された。

僕はもっと大至急に改正してほしい別の庭球用語が誰にも気付かれず放置されてゐるのを遺憾に思ふ。それは、眼で讀む靜態用語でなくて、口で稱へる動態用語、即ち撥音を伴ふ勝負のカウントである。カウントは要するに數字である。此の數字が國語として獨立しない様な國が、世界中、植民地以外にあるだらうか。而も試合毎に、時には何千と云ふ觀衆の前で、擴聲器を通じてアナウンスされ、而も、誰一人怪しむ者なしと云ふ現状には、呆れざるを得ない。——中略——わざわざ樞軸國を招いて置いて、お互が一番嫌ひな英語で、而も用を足す程度なら未だしも、擴聲宣唱するなど、まことに恥しき至りである。今年は伊太利が来るだらうが、それまでは伊太利語の出来る審判者を得る事は先づ不可能だ。惡口は此の位にして置くから、今度の懸賞募集には是非審判用語を真先に考へて頂きたい。固より『三十』『四十』などの數字にはとらはれないで頂きたいものだ⁷⁾。

ここにおいて、審判用語の邦語化を早急に考案すべきことを、反英米思想のもと明確に言及されることになった。さらに、この記事が掲載された『テ

ニスファン』の同巻号に「『庭球用語の日本語化』の^{もたら}齎す影響」という記事も掲載されており、次のようなことが述べられている。

獨りテニスのみ依然として輸入當時の舊體を改め得ないのは又何故であらふか！私は今その原因を知ると共に、一日も早く改良す可き點を改良し、我がテニスをして一層その基礎を擴汎にして確實ならしむる必要を力説するものである。——中略——我々は日本國土に於て、且つ數萬の日本觀衆を前にして外國語を…而も日本語程解る筈のない英國語を時には、フィフティーンラブと洒落て見たりして…使用して來たのである。我々は斯んな『有り得べからざる惰性』から一日も早く脱却すべきである。——中略——別の理由で…例へば常に裕福でない庭球協會の資金の問題に關しても、このテニス用語の邦語化といふものは相當の役割を果すであらう。と言ふ意味は、平易なる用語は容易に大衆の理解と興味を吸収するからである。——中略——何も所謂新體制に即應して庭球用語を改正する迄もない。我々庭球人士の國民的自覺が斯ふ叫んだ！と私なら主張し度い⁸⁾。

先の田中氏の論調ほどの反英米色は見られないが、英語でコールする審判用語を「有り得べからざる惰性」と呼ぶように、テニス用語の邦語化の必要性を強く述べていることは明らかである。また、「新体制」に対応するのではなく、我々「庭球人士」が自発的に邦語化を推し進めることを主張していることから、国粹的な論調が色濃く表れているといえる。

2-3 テニス廃止論への対抗措置

戦局悪化に伴い、昭和 18 (1943) 年 3 月、文部省により「戦時学徒体育訓練実施要綱」が制定された。ここに、中等学校のスポーツの全国大会と大

学のスポーツのリーグ戦の開催が禁止されることとなった。

さらに、全国高等学校長の決議により高等学校の全国大会も中止されることとなった。そのため、昭和 18 (1943) 年度に予定していた学生テニス界のトーナメントやリーグ戦はほとんど開催されなかった。しかしながら、以下の雑誌記事によれば、大学においては細々とながらも活動できていた様である。

今年の様に庭球が野球その他の競技と相並んで體育界、と云ふよりもむしろ文部省方面で議論された事は未だ嘗てなかった——中略——然し最近に至ってその問題も一段落した形になった様である。——中略——最初はまるで學生の庭球は今にも禁止されて了ふんぢやないかと大分懸念された向きもあった——中略——落ちつく所に落ちついて見ると大學級はある一部を除いては殆んど從來と大した變りなく練習も出来るし試合にも出場出来る⁹⁾。

また、大日本学徒振興会は体力錬成 11 種目を指定したが、テニスはそこから除外された¹⁰⁾。同会の指定種目に外れたことは、原則として学校におけるテニス活動の場が消滅することを意味していた。その後の日本におけるテニス活動は数少ない民間クラブにおいてのみとなった。

その後もテニス関係者は、唯一のテニス専門誌『日本庭球』¹¹⁾を利用して、テニスの必要性を唱える中でナショナルスティックな側面を強めていった。

殆ど人生の大半を庭球道に精進した自分にとっては、庭球に対する世間一部の誤れる批判は眞に身を切らるるよりもつらく甚だ拙者乍らここに一文を草する所以である。私は今日迄、幾度か庭球が日本の剣道と殆ど同一のものであると云ふ事を機會ある毎に提唱して來た——中略——テニスを通じて日本精神を発揮すべく日夜不斷の努力訓練を為すと云ふ事

が、最肝要なりと痛感する。—— 中略 —— 此大東亜戦争を勝ち抜く為にも庭球道を通じて常に錬成を怠らぬ様心懸ける必要がある¹²⁾。

ウィンブルドンやデビスカップ戦で活躍して、外国駐在経験があり国際的視野を持った清水善造氏でさえも、この様なナショナリスティックな考えをこの当時持っていた。ここで注意すべきことは、これらの論調に反英米色が必ずしも表れているわけではないということである。つまり、テニス用語の邦語化の第一の目的は、英語禁止ではなく、テニス廃止論に対する防波堤としての役割であったと考えられる。当時の我が国のテニス活動そのものの存続に深く関連付けられていたのであった。

3. テニス用語の邦語化の具体的な展開

3-1 審判用語の邦語化 —— 日本庭球協会審判用語委員会（昭和 16 年）——

テニス用語の邦語化が諸所で主張されたことや、時局が進展するにつれ敵国英国発祥のテニスを無用とする論調も出てきたこともあり¹³⁾、昭和 16（1941）年 9 月 13 日、日本庭球協会理事会において審判用語委員会が設置され、10 名の委員が会長より指名された。

委員長 安部民雄

委員 三木龍樹、長堀和一、村上保男、長谷川寛治、浦里、福田雅之助、
中川善之助、井上昶、伊藤滋朗

同委員会は、審判のコールする用語の邦語化を企図したものであった。

10 月 3 日、15 日の 2 回の会合を経て、「大體の成案を得た」ので明治神宮体育大会庭球競技において試験的に実施したところ、当初は「今までの英語

のカウントで澤山だ、時局にへつらふもの」¹⁴⁾という反対の声もあったが、概ね「豫想外の好評を博した」ようであった。その後、12月12日の委員会において、下記の決定案が作成され、昭和17(1942)年度より一般に実施されることとなった。また、テニス用語全般の邦語化は今後の課題とし、今回は審判用語と試合前後における審判及び選手の行為に対する改正に限定したものであった¹⁵⁾。

○試合前の行為

主審、線審コートへ、線審着席、選手コートへ、主審及選手にてトウス、主審着席、選手郭ベースライン中央に立って主審（主審審判臺に立つ）に禮（握手せず）、同じく選手同士挨拶（禮）亂打三分間

○試合前の言葉

1. 「用意」
2. 「只今より〇〇〇〇大會〈單 複〉試合〈準決勝 決勝〉を行ひます。」
3. 「右は甲選手、左は乙選手であります。」
4. 「〈一 二 三〉セット試合」
5. 「甲選手サーヴ」
6. 「始め」

註2と3は觀衆多數の試合以外は略す。

○試合中の用語

1. 十五對零 (15-0), 十五對十五 (15 オール), 十五對三〇 (15-30), 三十對三十 (30 オール), 四十對三十 (40-30), 四十對四十 (ジュース), 甲一點 (advantage 甲), 四十對四十 (ジュース)
2. ゲーム甲 一對零 甲勝越 (Game won by Mr. 甲 Games is 1-0)

甲 lead)

ゲーム乙 二對二 (第一セット) (Game won by Mr. 乙 Game are 2 all 2nd set)

ゲーム第一セット終り 六對三甲勝 (Game and 1st Set won by 甲 6-3)

3. 第二セット始め…ゲーム第二セット終り 六對二乙勝 セット一對一 (Game and 2nd set 乙 6-2)
4. 第三セット始め…ゲーム第三セット終り六對四甲勝 セット二對一 甲勝越 (Game and 3rd set 甲 6-4, 2 sets to 1 甲 leads)
5. 第四セット 乙サーヴ始め
6. 第五セット始め
7. ゲーム, 試合終り甲勝, 第一セット甲六對三, 第二セット乙六對二… (Game Set and Match won by r. 甲 Score 6-3 2-6…)
8. (試合中の用語中) 訂正 (Correction) 他は現在のまま

○試合後の行為

選手はサーヴィスセンターライン邊にてネットをへだてて位置し先づ主審に禮, (主審は臺に立つ) 次に選手同士挨拶 (握手せず禮) して後, 主審, 線審, 選手退場す。

○複試合の場合

複試合は甲丙 (組), 乙丁 (組) と呼ぶ, 但し團體對抗試合の場合は試合中單複共個人名を呼ばず, 團體名をいふ。

因に審判用語中に, 試合に於ける競技者が得た點數 (ポイント) で, 一點を十五, 二點を三十, 三點を四十と稱ふのは, 世界各國 (盟邦獨伊等を含む) で協定した庭球競技規則に明記してある為である。

3-2 テニス用語全般の邦語化

— 日本庭球協会庭球用語委員会(昭和17年) —

審判用語委員会は、審判用語に関する邦語化の考案、および、翌年度〔昭和17(1942)年度〕からの全国実施という当初の目的を達成した。そのため、今後の課題とされたテニス用語全般の邦語化のため、昭和17(1942)年3月20日の理事会において、同委員会は「庭球用語委員会」と名称が変更され、新委員が任命された。

委員長 安部民雄

委員 三木龍樹、福田雅之助、井上昶、野坂義雄、泉仙介、長谷川寛治、村上保男、高島哲三郎、高松定一、中川善之助、舟橋諄一（下線は重任）

人数的には10名から12名に増員され、委員長の安部民雄を含め7名が重任となった。おそらく、この7名は委員の中でもテニス用語の邦語化に特に大きな役割を果たしたと予想される。重任した委員の1人である福田雅之助は、昭和17(1942)年7月に『庭球 其の本質と方法』⁶⁾を著しており、その中でテニス用語の邦語化を試みた。彼は同書の執筆にあたって、『ローンテニス』第18巻4月号に「球語邦化」と題する文章を掲載した。

今庭球の本を出すので、庭球用語を邦語化したいと思って、取り掛って見た。處が最初は割合に巧く行きさうだったが、全部となると中々困難であることを知った。それで意味の不明で却って混亂に陥るといけなと考へたので、不本意ながら、基本的のものは原形のまゝにして置いた。しかし考へ就いた譯語は大概附して置いた¹⁷⁾。

表1 福田『庭球』(S17)と大日本体育会『庭球規則』(S19)の邦語化用語の比較

原 名 称	福田(S17)	大日本体育会(S19)
テニスコート	庭球場	
コートサーフェス	—	競技面
サイドライン	側線	
ベースライン	底線	
サービスライン	サーヴ線	受球線
センターマーク	中央標	中標
サービサイドライン	サーヴ側線	受球側線
ハーフコートライン	中央線	
サービスコート	サーヴコート	受球区割
ネット	ネット	網
ネットポスト	支柱	
センターストラップ	中央帯	中帯
ボール	球	
ガット	張絲	
ラケット	枠	打枠(ウチワク)
レフリー	審判長	
アンパイアー	審判	主審
アンパイアー	—	副審
ラインズマン	—	線審
スコアラー	—	記録員
マッチ	試合	
ポイント	點	點
ゲーム	ゲーム	元
セット	セット	節
サーバー	サーヴァー	発球者
レシーバー	レシーヴァー	受球者
アウト	アウト	線外
フォールト	フォールト	外れ
フットフォールト	足のフォールト	踏越
レット	遣直し	
インプレー	競技中	繼續
トス	トス	拳
ハンディキャップマッチ	ハンディキャップ試合	差別試合
パートナー	組手	
スコア	—	記録
フィフティーン(15)	15	一點
サーティー(30)	30	二點
フォーティー(40)	40	三點
デュース	デュース	同點
アドバンテージ	〇〇(側)一點	
ネットオーバー	—	反則
ネットタッチ	—	反則
プレー	始め	

原 名 称	福田(S17)	大日本体育会(S19)
ナットアップ	—	二弾ミ
イングリッシュグリップ	縦持	
ウェスタングリップ	横持	
イースタングリップ	斜持	
フットワーク	足捌き	
スピン	廻轉, 順廻轉	廻轉
ストローク	打球	
ドライブ	上打, 順廻轉, 順廻轉打	上打ち (ウウウチ)
スライス	下打, 逆廻轉, 逆廻轉打	下打ち (シタウチ)
グラウンドストローク	弾み打	
フォアハンド	順手(ジュンテ)	
バックハンド	逆手(ギャクテ)	
クロスボール	斜球	—
ストレートボール	縦球	—
サービストス	押上げ	—
フォアハンドドライブ	—	順上打
バックハンドドライブ	—	逆上打
フォアハンドスライス	—	順下打
バックハンドスライス	—	逆下打
バックスイング	引き方	
フォワードスイング	出し方	
フォロースルー	振り餘り	
ロブ	高球, 揚球	揚球(アゲダマ)
チョップ	切り球, 切り打	切り打
ボレー	宙打, 當打	宙打(チュウウチ)
ハーフボレー	掬ひ打	掬ひ球
ドロップショット	落し球	落球(ラクキョウ)
サーブ	打始め, 始球	発球(ハッキウ)
スライスサーブ	斜打サーヴ	—
フラットサーブ	平打サーヴ	—
ツイストサーブ	捻り打サーヴ	—
リバースサーブ	逆捻り打サーヴ	—
レシーブ	受け方, 受球	受球(ジュキョウ)
スマッシュ	—	打込
ネットプレー	前陣戦	
ベースラインプレー	後陣戦	
シングルス	單試合	
ダブルス	複試合	
ミックスダブルス	混合試合	—
ボーチ	横取り	

不思議なことに、この文章からは、日本庭球協会の庭球用語委員としての立場から邦語化に取り組んでいるという言及は全くなかった。まるで、福田個人で邦語化を案出しているかのようであった。このことから、福田自身がテニス用語の邦語化について積極的に取り組んでいることは明らかであり、庭球用語委員会での実務的な役割を担ったのは、委員長の安部と早大庭球部OB 同士で親交が深かった福田であろうことが推測される。

前頁の表は、福田雅之助『庭球 其の本質と方法』[昭和 17 (1942) 年]と大日本体育会『昭和十九年度 庭球規則 附邦語化の庭球用語、審判の心得』[昭和 19 (1944) 年]のテニス用語の邦語化である。

類似する用語が多いことや、より邦語化の精度が高まっていることから、昭和 17 (1942) 年 7 月に刊行された福田の『庭球 其の本質と方法』で発表された邦語化用語は、邦語化の最終形態ともいえる『昭和十九年度 庭球規則 附邦語化の庭球用語、審判の心得』の叩き台となったといえる。

4. おわりに

テニス用語の邦語化への動きは、昭和 10 (1935) 年頃から始まった。当初の理由は、ルールの平易化によるユニバーサルなサービスの提供において、テニスのより広範な普及を狙いとしたものであった。

その後、日中戦争の長期化、英米との関係悪化により、英国を発祥とするテニスの廃止論が高まる。これに対して日本庭球協会は様々な施策を行ったが、その核として昭和 16 (1941) 年 9 月、専門の委員会を新たに設置して用語の邦語化が漸次行われることとなった。テニス用語の邦語化は、昭和 18 (1943) 年 3 月に日本体育会が行った一連のスポーツ名の邦語化に対応して開始されたのではなかった。

テニス用語の邦語化は、当時の時局に踊らされ、軍部に迎合した結果生じ

たネガティブな事柄と一面的に断定することはできない。邦語化の理由としては、テニス廃止論への対抗措置という側面が実質的には大きかったのではないと思われる。事実、邦語化に深く関わった安部民雄¹⁸⁾や福田雅之助らは、渡英米経験もあり国際的視点をもったリベラルな考えを持つ人物として名高い。

この視点で周辺を見ると、最も権威のある全日本庭球選手権大会を明治神宮大会と兼ねて挙行した¹⁹⁾ことや、テニス選手を対象とした体力章検定のための錬成会を各地で開催したことなども、邦語化と同様にテニス廃止論を中和させるための措置ともいえる。

当時の英語禁止論の風潮下で軍部に迎合して邦語化を主張する者、純粋にテニス存続を思って苦肉の策として邦語化を主張する者、両者の起点は異なるがその着点（テニス活動の存続）は同様であった。つまり、当時のテニス用語の邦語化を妨げるものは皆無に等しく、日本テニス界の統轄組織である日本庭球協会および大日本体育会庭球部が全国的に邦語化を通達・実施したことは、当時の状況下では一定の必然性があったといえる。

《註》

- 1) 大石五雄『英語を禁止せよ——知られざる戦時下の日本とアメリカ——』ごま書房、平成19(2007)年、12-17頁。
- 2) 後樂園スタジアム社史編纂委員会『後樂園スタジアム五十年史』後樂園スタジアム、平成2(1990)年、38頁。
- 3) 日本庭球協会は、昭和17(1942)年11月29日に解散式を行った後、大日本体育会庭球部に継承された。
- 4) 野球については日本野球連盟の指示のもと邦語化が実行された。
- 5) 「庭球用語の邦語化」、『ローンテニス』第11巻5月号、昭和10(1935)年5月、14頁。
- 6) 「懸賞募集 庭球用語の改正」、『テニスファン』第9巻第1号、昭和15(1940)年1月、9頁。
- 7) 田中薫「近頃疑念一束」、『テニスファン』第9巻第2号、昭和15(1940)年2月、34-35頁。
- 8) 茶々丸「『庭球用語の日本語化』の齎す影響」、『テニスファン』第9巻第2号、

昭和15(1940)年2月, 36-38頁。

- 9) 井上昶「前進」『日本庭球』第2巻第7号, 昭和18(1943)年7月, 2頁。
- 10) 岡田四郎「必至撃滅の体力」『日本庭球』第2巻第7号, 昭和18(1943)年7月, 7頁。
- 11) 『ローンテニス』と『テニスファン』共に昭和17年10月号を以て終刊して, 翌月号[昭和17(1942)年11月号]から両誌を統合するかたちで『日本庭球』が刊行された。『日本庭球』は昭和18(1943)年12月号をもって終刊。
- 12) 清水善造「世間の批判に答ふ」, 『日本庭球』第2巻第10号, 昭和18(1943)年11月, 5-6頁。
- 13) 城西球人「テニス爐談(下)——批評家とファンの會話——」, 『ローンテニス』第18巻3月号, 昭和17(1942)年3月, 20頁。
- 14) 城西球人「テニス爐談(上)——批評家とファンの會話——」, 『ローンテニス』第18巻2月号, 昭和17(1942)年2月, 25頁。
- 15) 日本庭球協会・全日本学生庭球連盟『庭球年鑑』(昭和15—17年), 昭和17(1942)年より。
- 16) 福田雅之助『庭球 其の本質と方法』(青年体育運動の書) 欧文社, 昭和17(1942)年7月。これは欧文社が刊行した叢書であり, 他には『相撲』『スキー』『陸上競技』『剣道』『柔道』『射撃』『水泳』『野球』『卓球』『銃剣術』『体力章検定』がある。欧文社は『庭球 其の本質と方法』を刊行した翌月に社名を「旺文社」と改称している。岡田邦子『日本テニスの源流——福田雅之助物語』毎日新聞社, 平成14(2002)年および大石五雄, 前掲書より。
- 17) 福田雅之助「球語邦化」, 『ローンテニス』第18巻4月号, 昭和17(1942)年4月, 10頁。
- 18) 安部民雄は『ローンテニス』第16巻9月号(昭和15年9月)から後継誌である『日本庭球』第1巻第1号(昭和17年11月)まで「ティルデン庭球術解説」を24回に渡って連載した。
- 19) 昭和17年の明治神宮錬成大会から全日本庭球選手権を兼ねることになった。

(ごとう・みつまさ 政治経済学部専任講師)